装飾古墳の世界

浜田耕作先生は1917年、京都大学考古学研究室の第１回報告書として『肥後における装飾ある古墳及横穴』を出版され、装飾古墳の主要な文様である「直弧文」の命名者でもありますので、第11回浜田青陵賞受賞記念講演として、「装飾古墳の世界」について私見を述べさせていただきます。

装飾古墳とは石棺や石棺を納める石室などに、浮き彫り、彩色、線刻などの手法を用いて装飾を施したもので、全国に約600基あります。そのうちの４割弱は熊本県、ことに菊池川流域に集中しています。さらに福岡県と大分県西部地域の事例を含めますと、６割以上の装飾古墳がこの地域に分布しています。

九州の装飾古墳は、４枚の板石を組み合わせて作った箱式石棺に文様を施すことから始まりました。最古の例としては４世紀後半の熊本県広浦古墳を挙げることができます。ここでは刀、

円文、刀子、鈴が描かれています。ついで5世紀には墓室の4壁に沿って板石（石障）を廻らし、その内部を3つに仕切って複数の遺体を安置する埋葬法が登場しますが、その石障や奥室の入り口の壁に装飾がみられます。

5世紀の終わり頃にはまた違ったタイプの装飾古墳が出現します。家形石棺の長い方に取り外しが可能な側壁を設け、それを外すことで何度も追葬できるように拵えて、円文、三角文、あるいは靫などを浮き彫りし、彩色するものが現れます。「ワカタケル大王」から下賜された鉄剣を出土した船山古墳のすぐ近くにみられる塚坊主古墳が最も古く遡るもので、石室の構造は「石屋形」と呼ばれています。

6世紀の中葉になると、石屋形を大型化し奥壁に石の棚を設け、その下に石棺を安置する巨大な石室をもった古墳が出現します。石室内に全面多様な装飾を施したことで有名な福岡県王塚古墳、竹原古墳などです。この石屋形構造の石室は菊池川中流域で典型的に展開し、石棚をもつ古墳は石屋形を備える古墳の周囲に分布しています。このことから、装飾古墳の来歴は熊本県菊池川流域と密接にかかわりをもっていたことが窺えます。

直弧文や初期の段階に描かれた刀や刀子などの器物類は、邪を避けるため（辟邪）の考えに基づいて描かれたものと想定されています。刃物を描くのは死体に悪霊が取り付かないようにするためのもので、今日死者の枕元に刃物を置くことと一脈通じる所作です。また6世紀の末葉になると船や鳥が石室の壁に彩色で描かれることもあります。「天の鳥船」で、死者の霊魂をあの世に送るための物と解釈されます。

これらとは異なった装飾絵画も見られます。福岡県珍塚古墳では、ヒキガエル2匹と月を表した円文があり、竹原古墳では玄武と朱雀が描かれています。これらは中国的世界との出会いがなければ描けないモチーフです。また馬もあります。馬が葬送儀礼と結びつくのは、中国東北地方の烏丸や鮮卑などにみられます。一方死者の魂を船であの世に送るという思想は日本在来のものです。船に馬を乗せるという、中国的な世界と日本的な世界が合体した思想を看取できるものも見られます。これらは6世紀後半段階の一時期に限って北部九州に認められます。朝鮮半島で高句麗、百済、新羅が覇を競っていた時期です。このとき倭は朝鮮南部に干渉して、九州の多くの「国造軍」を派遣しました。彼らが帰国後に死を迎えたとき、朝鮮で目の当たりにした中国的世界と日本的世界の融合現象が起きたものと考えられます。倭は朝鮮から撤退の後には、100年以上彼の地に踏み込むことはありませんでした。装飾古墳に見られるこうした融合現象は、6世紀中葉に朝鮮に送り出された九州の武将たちの間に生まれた一時的な「思い」が表現されていたとも考えられます。

第11回浜田青陵賞受賞記念講演　1998年9月19日